

## 「望む善は行わず、望まない悪を行っている」

2018年09月22日

ローマの信徒への手紙 7章 14節～25節 わたしたちは、律法が霊的なものであると知っています。しかし、わたしは肉の人であり、罪に売り渡されています。わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。もし、望まないことを行っているとすれば、律法を善いものとして認めているわけになります。そして、そういうことを行っているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。もし、わたしが望まないことをしているとすれば、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。それで、善をなそうと思う自分には、いつも悪が付きまどっているという法則に気づきます。「内なる人」としては神の律法を喜んでいますが、わたしの五体にはもう一つの法則があって心の法則と戦い、わたしを、五体の内にある罪の法則のとりこにしているのが分かります。わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるのでしょうか。わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。このように、わたし自身は心では神の律法に仕えています、肉では罪の法則に仕えているのです。

パウロは、律法は聖なるものであり、掟も正しく、善いものであると認識していた。しかし、それらの律法・掟が罪を生み出し、死をもたらした。善いものがなぜ死をもたらすのかという問いに、「罪がその正体を現すために、善いものを通してわたしに死をもたらしたのです。このようにして、罪は限りなく邪悪なものであることが、掟を通して示されたのです」と答えている。パウロはここから、律法によって暴露された罪の狂おしい実態について、苦悩の告白をしている。

パウロは、律法が霊的なものであると知っているが、自分は肉の人であり、罪に売り渡されていると、自分の中に巢食っている罪にもがいている。「わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。」律法を善いものとして認め、善をなそうとする意志はあるが、それを実行していない。「わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。もし、わたしが望まないことをしているとすれば、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。」善をなそうと思う自分に、いつも悪が付きまどっているという法則に気づく。「内なる人」としては神の律法を喜んでいますが、自分の五体にもう一つの法則があって心の法則と戦い、私を五体の内にある罪の法則のとりこにしている。「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか」と呻く。ところが突然、邪悪な罪の実態に苦悩するパウロは、「わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします」と言う。善悪を越えて「あるがまま」の自分を、そっくり受け入れてくださる十字架の赦しへと思いが駆り立てられ、感謝が噴き出て来たのである。心では神の律法に仕えているが、肉では罪の法則に仕えている私を無償で赦し、神と共にある救いを与えてくださったイエス・キリストを賛美する。これが、パウロの信仰告白である。彼に倣い、続く者でありたいと思う。